図書紹介

宮崎　惇著

『棚橋源太郎――博物館にかけた生涯――』

横山　悦生

棚橋源太郎の名は、理科教育史の分野では「直観教授法」の提唱者として、理科教育に観察・実験を取り入れたことで知られているが、「博物館学の父」と称されるような博物館にかかわる業績はあまり知られていない。棚橋の後半の人生は、「博物館にかけた生涯」であった。博物館に関する最初の著書である『眼に訴える教育機関』（宝文館、1930年）以降、十数冊の博物館にかかわる著書を執筆し、博物館法成立のために「かけずり回り」、日本の大学で初めて開講された「博物館学」の講義及び実習を1953年から1960年（棚橋91歳）まで担当した。本書は、この棚橋源太郎という人物の生涯を伝記という形式をとってまとめたものである。

本書の目次は次のとおりである（カッコ内は頁数）。

誕生（１～12）、小学校時代（14～28）、師範学校へ（29～43）、高等師範学校へ（44～62）、東京高等師範学校へ（63～81）、博物館主事を引き受ける（82～99）、通俗教育館（100～118）、東京博物館長となる（119～134）、赤十字参考館（135～157）、東京科学博物館開館（158～186）、博物館法制定（187～211）、棚橋源太郎先生年表（212～256）、参考図書・協力者一覧（257～259）

本書を読んで興味を引かれたことの１つは、棚橋が実科教育（実生活に役立つ教育）の重要性をいち早く認識し、その具体的な手だてを理科だけでなく、家事科や手工科についても論じており、広い視野で実科教育を論じていたことである（手工科については、岡山との共著『手工科教授法』が著されている。また、実用の学校園づくりを提唱している）。

また、この東京高等師範学校付属小学校での実科教育の理論と実践とともに、師範学校

の学生時代に名和靖（岐阜市にある名和昆虫博物館の創設者）と出会ったことが、後に棚橋が博物館の事業に大きくかかわることになっていく背景にあることが、本書から理解できるが、この点も興味深かった。

棚橋は、その後「東京教育博物館」に移り、博物館教育にかかわっていくが、その際「学校設備用品」の諸問題の調査をし、『学校設備用品』をまとめている。そのなかで「校舎内の施設として学校博物館についても取り上げ、ドイツの郷土博物館や米英の高等学校にある博物館などにも言及し、『博物館は校内校外を問わず、児童生徒の教育上、欠くべからざる必要機関であり、学校外にあるすべての博物館は、これを学校の補助的施設とみなし活用すべきである』」と論じている。この文章を読んで、昨年ハバロフスクの学校を視察した際に、各学校の博物館がよく整備されていたことが思い出された。

その他、「生活改善展覧会」を契機に棚橋が生活改善運動にかかわっていったこと、赤十字社参考館時代には医学や衛生学を病院や医学校の中から一般大衆の中へひっぱり出したことなど、興味を引かれたことは多々あった。

さらに棚橋の業績について詳しく知りたい人のためには、棚橋源太郎先生顕彰・研究会編『棚橋源太郎先生（1869－1961）研究資料集』（岐阜県博物館友の会発行，1992年）がある。この資料集は、友の会には在庫がなく、国会図書館や岐阜大学附属図書館などで閲覧（・複写）することができる。この資料集のもくじも参考までにあげておく。

1．棚橋源太郎先生年表（宮崎惇）
2．棚橋家小史（棚橋源太郎手記）
3．棚橋源太郎先生著作目録（1）（新井孝喜）
4．岐阜県博物館所蔵棚橋源太郎先生関係資料目録（1）
5．同上（2）〔新井孝喜氏寄贈の部〕（同書編集委員会）
6．「棚橋源太郎研究」参考資料　日本全国書誌第1841号　（国立国会図書館）
7．国立科学博物館所蔵「棚橋文庫」目録（単行本の部）（棚橋源太郎先生顕彰・研究会）
8．棚橋源太郎先生の業績（宮崎惇）
9．伝記「棚橋源太郎――博物館にかけた生涯――」目次と奥付（宮崎惇）
10．本邦博物館機構の改善〔遺稿（未完）〕（棚橋源太郎）

なお、本書を入手するには、以下に示す連絡先に申し込めば送付してくれる（後日、振込用紙が送付されてくる。定価は送料310円をあわせて1810円）。

岐阜県関市小屋名小洞1989
岐阜県博物館内岐阜県博物館友の会
電話：0575－28－3111
FAX：0575－28－3110

（岐阜大学教育学部）